

# 次の世代が農業を

## 継ぎ易くするために

今は、田んぼ12枚（120アール）を作付けしています。いくら小さい時から手伝っていたといっても、自分でやるというのは、全く違うものだと実感しました。大学で学んだこともどちらかと言えば、農業経営に関することが主でしたし、一応実習などはありましたが、一から自分でやらなければならぬとなると、日々勉強になることばかりで、今は、親せきや近所の先輩たち、県農業事務所の普及技術員の方々が力強い味方です。

今年、「鉄コーティング」という直に種もみを田んぼにまく技法に挑戦しようとして昨年から考えていました。県の農業事務所の方などに相談に乗っていただきながら、この技法には現状の田んぼがおかれている利水環境があまり適していないことも考慮して、実験的に3枚分（30アール）をw.c.s（ホールクroppサイレージ）専用品種で4月末に種をまきました。実は、近所の方からはあまりすすめられなかったんです（苦笑）。自分でも抵抗があった

のは確かです。昔から、稲作と言えば「種を発芽させてある程度育苗したものを田んぼに植える」移植という方式で作付けされています。今も、ほとんどがこの方法です。多古の先人たちが長い間試行錯誤を続け、今の農法に至っていることは、重々承知していますし、尊敬しております。実際に農作業を通して理にかなっていると思わせることも多々あります。

しかし、稲作を含め農業全体に言えることかもしれません。「時間」「経費」において省力化が求められているのも事実です。特に、米価が低迷している現状のなかで、いかにして経営を維持していくかを考えた時に、従来の農法を変えていく必要があるのではな



同じ地区に住む親せきのおじさんは田植えの良き相談相手

です。当然、自分だけではなく農業に携わっている全ての方がこのことを考えているとは思いますが。

実際には生活していかなければならないという現実がありますので、今は兼業という形ですが、今後は専業ということを見据えながら、この技法の実証実験を着実にを行うことと自分自身が納得できる美味しいお米づくりに取り組んでいきたいと思っています。

追伸、多古の米作りを持続していくための助言お待ちしております。

※ホールクroppサイレージ：稲の実と茎葉を同時に収穫し、ロール状にして発酵させた畜産用飼料

### 鉄でコーティング？

文字通り種もみを「鉄でコーティング」し、田んぼに直播する栽培方法です。この技術は、育苗施設や、育苗にかかると「手間」「時間」「経費」を省くことを目的として国の機関で開発されたもので、千葉県内では平成17年に試験的に実施されました。多古町では、今回取材した宇井さんを含めて3回目の実施となります。

種もみを発芽しない程度（3〜4日程度）水に浸した後、鉄粉と焼石膏と種子をドラムと一緒に入れ混ぜ合わせることで、コーティングします。鉄でコーティングすることで、スズメの食害を防いだり、種子伝染病から守る効果があります。



鉄でコーティングされた種もみ

病気・長期の入院といった状況になってしまった際には、ストップしてどうにも進まなくなってしまう。自分たちの一番のメリットはそこ。組織でやっていたら、そこをカバーできる。組織を作る際において一番重要なのが信頼関係。当然、借金が伴うことだから、お互いに腹を割って信用し合えるメンバーじゃないと難しい。自分だけ都合のいいように運営して、自分だけ何とかして儲かればいいという気持ちだと組織化は厳しいよね。

自分たちのやり方は、必ずしも国が進めているものではないかもしれないけど、地域にはいろいろな事情があるから全てが国の推進するような取り組みができるわけではない。それぞれの地域にあったやり方を支援してくれるような体制があるといい。補助金や多古米のPRをするのも一つの方法だけど、こういう形で生産者を元気づけていくか、この先も生産者が続けられるような体制をどうやって作っていくかが今後大切なんだろうね。

# 挑む 個人では成り立たない時代がやってくる

「個」からの脱皮。共同で稲作に取り組む

挑むグループ S (shima) ファーム

4月中旬のまだ吹き付ける風が肌寒い土曜日、島地区の田んぼに足を運び、「タツタツタツ」と軽快なリズムを刻みながら往復しているひととき。大きな乗用田植え機が目に入り、島地区に住んでいる6人が集まり、平成9年から共同で稲作に取り組んでいるという「S (shima) ファーム」の方々に発足についての話を伺いました。

きっかけは、島地区の土地改良事業のなかに集約化（集団化）の要件があったことに加えて、基盤が整ったならば、これからの農業は投資を抑える意味で集団化・組織化して農機具などにかかる経費を抑えていこうという考え、つまり、全ての機械類を個人でそろえて「個」で完結する農業から脱皮しようという思いや、大型の機械を導入することによって体への負担も軽くなり、長く続けられるという考えがあった。共同で機械を買って個別に使うよりもあるけど、Sファームでは管理する田んぼの作業はみんなで行うというやり方なので極端な話し、誰かが都合で作業に出られなくてもSファームとしてやってくれる。個人で大きな面積を作付けしている人もいますが、一番心配なのは、例えばがや



「S (shima) ファーム」のメンバー  
左より  
戸村浩之さん、大網義己さん、郡司 平さん  
越川光男さん、大木信一さん、星野一夫さん